第 208 回東葛しぜん観察会

白樺派ゆかりの地とハケの道を歩く

平田 裕子（柏市）

開催日時：2025 年 11 月 16 日（日）10：00～12：00
場　　所：我孫子手賀沼畔ハケの道（我孫子市）
参 加 者：一般 31 名、指導員 17 名、担当指導員：前田、高橋(重)、平田

下見時は雨天だったので天候が心配されましたが、秋らしい青空が広がりました。31名の参加者は 3 班に分かれて出発。すぐに『蚕霊塔』『石橋生絲我孫子工場跡』に到着、官営の富岡製糸場操業後 30 年、民営の製糸場として 300 人以上の女工が働く大規模な工場で製品は鉄道で横浜に運ばれ、フランス・アメリカへ輸出された。工場跡の公園で蚕の食草であるクワの説明、雌雄異株、マグワとヤマグワあり。明治天皇宿泊の角松旅館を見て水戸街道に到着。水戸と江戸を繋ぐ街道である水戸街道の我孫子宿の繁栄ぶりを地図と写真で確認。

杉村楚人冠(杉村広太郎)公園途中でチョコベリーの黒い実、サワラの茶色の球果を見る。公園では楚人冠という名前の由来が司馬遷の項羽本記の記述からとられたと話す。
国際的ジャーナリストで朝日新聞の写真雑誌「アサヒグラフ」の随筆で有名、関東大震災後に我孫子に移住。今は樹木で見えなくなってしまったが、筑波山や手賀沼の方向を確認、ハケの道へと下る。

志賀直哉邸跡では、白樺派が当時の学習院大学の学生達によって作られた同人誌「白樺」のもとに集った志賀直哉・武者小路実篤・里見 弴・有島武郎、柳 宗悦・岸田劉生・高村光太郎などが代表的で、大正期文壇の主流をなしたことを伝える。志賀直哉はこの地で 8 年間を過ごし「暗夜行路」などの代表作を書いた。庭にあるイチョウの葉で草花遊びを楽しむ。

ハケの道を辿り湧水に着く。看板前で、通ってきたハケの道が北総大地の一角をなす大地の崖下の道で、ハケの道と呼ばれ、崖から湧水が出ていたが崖上に住宅が立ち湧水が少なくなっている話。

手賀沼遊歩道へと歩く、途中民家の庭でフーリンガマズミを見る、葉の大きさ実の大きさがガマズミとは違って大きい。手賀沼遊歩道に上がってすぐの水門近くでは、下見時にはあったナガエツルノゲイトウ、オオバナミズキンバイが跡形もなく刈られていたので図で解説。特定外来植物に指定されていて繁殖力が強く、ほんの少しの断片からでも再生するため持ち帰らない、採ってしまった場合はビニール袋などに密封して処分することを話す。沼への踏み跡付近にツルマメがある。捻じれて裂開した豆果と種子を観察する。大豆の原種で豆果に茶色の毛が密生している様子など手にとって熱心に観察。アレチハナガサの紫色の花では「この花は初めて見ました」の声もあり。土手横では春を待つカラスノエンドウが若い茎の先に既に巻きひげを付けている。

進んで行くとシャクチリソバ、白い花と緑の実を観察。高血圧や心臓疾患の治療に使用されるルテインを多く含むため現在は薬用に栽培されている。写真を撮る方もいて花の様子を興味深く観察。

アビスタで休憩の後、天神坂を上がる。柳宗悦が住んでいた三樹荘の名前の由来となった3本の椎の古木(叡智・財宝・長寿を表す)を写真で見ていただく。嘉納治五郎の銅像前では、この像が市民の寄付によって建てられたと話す。予定の時間を過ぎてしまっていたので南口東公園へ急ぐ。参加の皆さんからは「シャクチリソバが良かった」「散歩コースだが説明を聞きながら歩くと楽しい」などのお言葉をいただきました。

志賀直哉邸跡の移築された書斎